

メディアにみる「家族を介護する若者」 ——日本における社会問題化を考える 松崎実穂

はじめに

日本において「家族を介護する若者」が注目されつつある。「ヤングケアラー」「若年介護者」等呼称はさまざまだが¹、近年メディアに元経験者を中心とした声が多く取り上げられはじめた。

外部に開かれた大きなイベントで「ヤングケアラー」がはじめて前面に押し出されたと考えられるのは「第9回市民発！介護なんでも文化祭」（2013年10月6日・於上智大学四谷キャンパス）内で（社）日本ケアラー連盟が実施したセミナー「10代で家族のケアを担うということ～ヤングケアラーが語る介護と看取り」である。この時プレスリリースへのメディアの反応は4社ほどだったが、2014年2月23日のシンポジウム「介護を担う10代・20代の子どもたち」（成蹊大学文学部澁谷智子研究室・日本ケアラー連盟主催、於成蹊大学）を機に注目が集まり、イベントや当事者への取材内容が大きく報道されはじめた。² また若年認知症家族の子ども世代の集まり「まりねっこ」を2012年12月よりクローズドで開催してきた『若年認知症ねりまの会 MARINE』（東京）は初めて外部公開した企画「若年認知症と向き合う子どものつどい」を2014年3月に開催。³ その後東京以外でのヤングケアラー、若者介護を冠した名称の集まりも行われ⁴、日本ケアラー連盟2014年フォーラムは「ヤングケアラー支援の輪を広げよう～若者たちが人生や夢をあきらめないために」と題された（7月23日、於憲政記念館）。こうして家族を介護する若者は支援の対象としてみられはじめ、社会問題化しつつある。では家族を介護する若者を描くメディアにおいては何が問題とされているのか。またその言説において家族を介護する若者はどのような主体として現れているのか。

本稿では、メディア上に日本における家族を介護する若者がどのような主体として現れているかを考察し、今後の研究における課題や論点——ジェンダー差異、社会的排除の構造、若者への支援と介護の社会化など——を提示したい。前述した経緯からヤングケアラーまたは家族を介護する若者がメディアか

らの注目やイベントを通じ社会問題化される動きが本格化したのは2014年2月以降と考えるため、本稿の分析で扱うメディア資料の時期は同年2月～7月とする。また、新聞記事は全国紙（朝日、読売、日経）からの8記事、雑誌記事は全国的な週刊誌（週刊朝日）からの1記事、テレビ番組はNHK総合で放送された1つを対象とした。

今回扱うメディア資料の特徴を次に挙げる。家族を介護する若者として登場するのは元経験者が多く、介護が始まった年齢は10代～30代である。介護が始まった理由は全てが家族の発病や発症であり、主に認知症、脳梗塞、進行性の難病である。

家族の介護を行う若者や子どもについては現在用語や定義が充分整理されていないが、紙幅の都合からそれらの検討はせず、文献について述べる際は参照元の用語をそのまま使用する。筆者自身の考察を述べる際は「家族を介護する若者」とする。

1 家族を介護する若者の「ライフコース選択の機会における困難」

家族を介護する若者を取り上げたメディアにおいては何が主な問題とされているのだろうか。今回参照した資料に登場する現役、または元・家族を介護する若者の年齢は9名が25歳以上であるが、ほぼ全ての者のライフコースに介護による影響が生じたことが描かれている（高校生のAさん⁵と大学生のBさんを除く）。高校を中退したEさん（読売新聞社, 2014, Mar. 25）、就職一年目で退職したCさん（朝日新聞社, 2014, Feb. 6）、就職活動ができなかったFさん（朝日新聞社, 2014, May 6；日本経済新聞社, 2014a, Jun. 18; 2014b, Jun.18）とGさん（日本経済新聞社, 2014a, Jun. 17; 2014b, Jun.17）、大学生だったが国家資格取得を断念したKさん（飯塚ほか, 2014, Jun. 17）といった介護による退職や学業中断、就学や就職機会を逸したことが挙げられ、学業や有償労働など若者が従事するとされている活動が介護により妨げられ将来に支障が出る、と問題視されている。そうした意識は記事見出しや番組タイトルにも現れている（「親の介護で未来を奪われる若者」（日本経済新聞社, 2014b, Jun. 17）、「介護で閉ざされる未来」（飯塚ほか, 2014, Jun. 17））。またEさんの「介護をしていたのにニートのように見られてしまう」（中津海, 2014, p. 158）という言葉

が取り上げられ、介護が終わってもその経験が評価されない、そしてキャリア中断や不形成がその後の人生に影響を与えることが描かれ、キャリア形成支援の必要が示されている。現状ではメディア言説において家族を介護する若者は、ライフコース選択の機会を逸し、自らのキャリア形成における困難を抱えた主体として描かれているといえる。

しかしこの「ライフコース選択の機会における困難」の乗り越え方に着目すると、その取り上げられ方には偏りがある。例えば「困難の物語」の描かれ方のジェンダー差異である。今回の資料に登場する家族を介護する若者は11名（内男性6名、女性5名）である。その中で男性の6名中4名については「ライフコースにおいて困難に直面し、苦闘したその結果または将来を考えて行っている現在の取り組みまで」という一連の物語が描かれる。例えばEさんについては、介護の負担により高校を退学せざるを得なくなり、介護後も就職活動が上手くいかなかったことと、パートタイム勤務を経て起業したことまで（中津海, 2014, p. 160）、高校生の時から介護をしていたFさんは大学生の時に就職活動ができず、奮起して自宅で行政書士として開業し、さらには若い介護者への支援を訴えて議員となってからの活動まで（朝日新聞社, 2014, May 6; 日本経済新聞社, 2014a, Jun. 18; 2014b, Jun. 18）が記されている。同じく就職機会を逸したGさん（日本経済新聞社, 2014a, Jun. 17; 2014b, Jun. 17）や、介護による様々な負担から会社を退職したCさん（朝日新聞社, 2014, Feb. 6）については、取材の時点においても介護を必要とする家族がいるか、介護が終わってから日が浅い状態だが今後の再就職について悩む姿や、介護経験を生かす道を模索する様子が描かれる。またGさんの登場する記事の結びは「若者介護で失ったものを取り返す歩みが始まろうとしている」（日本経済新聞社, 2014a, Jun. 17; 2014b, Jun. 17）であり、ここでのGさんは、介護後にその経験を生かしながらこれまで失われた様々な機会を取り戻そうとする主体である。

一方女性は、正社員から非正規パートになったDさん（朝日新聞社, 2014, Feb. 6）、就職の際非常勤を選択したHさん（中津海, 2014, p. 156）、退職したJさん（中津海, 2014, p. 158）、国家資格取得を断念し在宅介護を続けるKさん（飯塚ほか, 2014, Jun. 17）がキャリアへの明らかな影響を受けたことが示される。しかし介護が終わっている場合も、その後のキャリアの状況についてはあ

まり触れられない。現在も在宅介護が続くKさんのみ、介護をしながら近所の病院で受付をしていること、将来については先が見えないという本人の言葉が取り上げられている（飯塚ほか, 2014, Jun. 17）が、他は介護のため別居婚をしながら育児もしていたJさんが祖母亡き後、夫の元に引越すこと（中津海, 2014, pp. 158-159）のみである。Bさん（朝日新聞社, 2014, Feb. 6）、Hさん（中津海, 2014, p. 156）については在宅介護が終わった後のキャリアについて触れられず、Iさん（中津海, 2014, p. 158）については今後介護者の支援をしたいという思いがあることは記されるものの、困難の経験とその乗り越えについては書かれない。

介護のためライフコース選択の機会を逸し、自らのキャリア形成における困難を抱えた主体としてメディアに現れている家族を介護する若者であるが「キャリア上の困難に直面し、それを克服したか克服しようとしている」主体として表象されるのは男性であるといえる。この表象におけるジェンダー差異には、若者が介護役割を担うことに対する受け止められ方そのものにジェンダー差異または格差があることが反映されているのではないかと推察される。職業的キャリアが形成できて当然とされやすい若年男性が、介護でキャリアを中断または形成すらできないことは重大事とみなされる。だからこそメディア言説においてかれらが「困難に直面し乗り越える」までが物語として成立しやすいのではないかと推察される。一方若年女性の場合、そもそも結婚や妊娠・出産、介護等によるキャリア中断が未だにありふれたことであるがために、介護の「その後」が注目されにくいのではないかと推察される。だが女性の家族依存モデルを前提とした若年女性の貧困問題への軽視が現在批判されているように⁶、注目されないからといってそこに問題がないわけではない。

ヤングケアラー研究ではケアを引き受ける子どもに女子が多くまた女子の方が介護に費やす時間が長いというジェンダー格差がみられることは既に指摘されている（三富, 2000, p.411; 2010, pp. 298-299）。また土屋（2006）はALS患者の親を持つ子どもに焦点化した研究で、介助者である子どもに女兒が多く、また親や周囲の者から期待されるケア役割の重さにジェンダー格差があることを指摘する。だが、本稿で検討している社会問題化の過程で起こる主体化にまつわる機制、そこにみられるジェンダー差異についてはあまり論じられてこな

かったと思われる。十分な規模や内容の調査が行われていない日本の現状では、現在の社会問題化の過程で若い介護者がメディアにおいて主体化されまた「何が問題なのか」が論じられていく一方で「問題」としてみなされないことにも注意しながら、今後の研究や支援を考えてゆく必要があるのではないかと。

2 家族を介護する若者の「孤独や孤立という困難」

先行研究ではケア役割を担っている子どもが学校や近隣において差別的な扱いやいじめを受けることが報告されている（Aldridge & Becker, 2003, p.75; 三富, 2008, pp. 300-301）。また親をケアする子どもは親の状況を話せば自分がマイノリティの側とされたり（土屋, 2006, p. 115）、自分も親も「人と違う」と非難される（森田, 2010, p. 6）ため、他者へ「カムアウト」を行わないと指摘される。またケアを行う子どもは障害者福祉や児童福祉の狭間で認識されにくく（澁谷, 2012, pp. 3-4）、児童福祉の対象からも外れる年齢となると、かれらを直接支援する仕組みは存在しない。

今回のメディア資料においても家族を介護する若者の「孤独や孤立という困難」が取り上げられている。高校で友人に理解されず、教師に話しても何ら対処が講じられず精神的に孤立したEさん（読売新聞社, 2014, Mar. 25）、家族の認知症のことや失禁の始末など、介護について誰にも言えなかったFさん（朝日新聞社, 2014, May 6）とIさん（中津海, 2014, p. 158）の経験である。また家族を介護する若者が行政や福祉の制度を利用する機会や情報を得にくい困難として、役所を訪ねたものの「お母さんと来て」と言われ門前払いされたFさん（朝日新聞社, 2014, May 6）の経験も取り上げられている。ここでは若者が友人とのつながりや学校から孤立し、さらには行政や福祉制度へのアクセスもしづらという「孤独や孤立という困難」を抱えた主体として現れている。

しかしこうした困難は、若者が介護を引き受けているからこそ与えられるスティグマと社会的排除の存在を示しており、それは介護に対する社会の認識や対応そのものを問うものである。その点では先に述べたライフコース選択の困難についても同様である。

澁谷（2008）は「家族ケアを行う子どもという存在は、親が子どもをケアし、非障害者が障害者をケアするとされてきた、従来のケアの方向性を問う」

(p. 2) と述べ、社会においてケアの捉えられ方が偏っていることと、こうした子どもの存在が不可視となることを指摘する。今後は福祉制度上にかれらが捕捉されないことだけでなく、若い介護者の社会的排除の構造についてさらに検討されてもよいのではないか。例えば社会における介護に対する規範的意識と若者に対する役割期待との不和や、それに基づくスティグマや、学校をはじめとしたシステムからの排除について考察を深めるなどである。

3 家族を介護する若者への支援と介護の社会化

以上、現在の日本のメディア言説において家族を介護する若者が問題を抱えた存在という主体として描かれる様子、また社会問題化過程におけるこうした主体化のあり方からは見えづらいことについて述べた。本節ではこれらを踏まえ、今後の研究や支援に向けてどのような注意点や課題があるか述べたい。

まず、家族を介護する若者の「キャリア形成における困難」に関しては女性の「困難への対処とその克服」の状況が重視されづらく、問題視されない代わりに不可視化される可能性に注意すべきである。一方男性が「介護によって失ったものを取り戻す」というのが当然の帰結とされるのなら、キャリアを再形成できない場合どんなプレッシャーがかれらにかかるとしても考えて然るべきである。介護によって失ったものを取り戻すという物語が家族を介護する若者（介護中であれ、介護が終わった後であれ）に与える影響について考察し、家族を介護する若者の「困難を克服し/ようとする」物語が成立する時に、そこに回収されないかれらの経験やニーズが何であるかを考えていく視点が必要である。

次に、家族を介護する若者が孤立し排除されるという問題を抱えた主体であり、だからこそ支援されるべきという見方に関していえば、むしろ支援は重要である。英国では90年代にヤングケアラーという子どもへの焦点化および定式化に関する議論の結果、介護者支援制度における家族全体へのアプローチが理論的基盤となっている（三富2008, pp. 287-288）。今後日本でもこうしたアプローチをとることの重要性については北山（2012, pp. 72-73）も指摘する。家族を介護する子どもや若者が「問題を抱える」状況は、そもそも家族への支援が不十分なことを背景にしていることを考えれば、家族に包括的支援をし、

子どもや若者のニーズに対応しようとする見地は重要である。しかし、家族の介護をする若者が社会との横断的な接点において、まさに介護を担っているからこそ経験する孤独や孤立は、社会がかれらをどうみているか、またはどう無視しているかを表すものである。こうした社会的排除の状況と、また支援に介在する権力作用（荒井, 2014, pp. 32-38）について自覚的であることが、今後家族を介護する子どもや若者に対する支援を考えていく上で求められていると考える。支援が考えられる際に「何が問題なのか」を専門家が指定し、子どもや若者から介護負担を減らそうとするだけでは、結果的に介護の必要な者を含む他の家族成員の負担が増したり、介護を担ってきた子どもや若者が納得しづらい形での支援になる可能性も考えられる。この点については今後さらに議論がなされるべきであろう。

また現状の介護の社会化（またはケアの分有）の議論自体は、確かに有意義であろう。しかし、またフォーマル/インフォーマルセクターの協調や、地域のつながりを作り出してコミュニティケアを進めるといった取り組みは、果たして家族の介護をする子どもや若者の存在を包摂した介護の社会化につながっていくのだろうか？現在日本で進められようとしている介護の社会化（特に高齢者の介護）の文脈における家族介護者とは、例えば「仕事と介護の両立支援」のように、仕事や介護を誰かと分有できる者が想定されており、学業やキャリアの積み上げが少ない状態で仕事に従事するなど、社会的活動と介護をそもそも他者と分有しづらい子どもや若者についてはほぼ考えられていない。介護の社会化という過程、またそれによって生み出される新たな介護やケアの仕組みの内に、家族を介護する子どもや若者の存在は含まれていないのではないか。さらに、介護を担う家族の存在が暗に想定された現行の介護保険制度（藤崎, 2014, p. 619）においては、その家族が誰なのかは不明確であり、むしろ介護をする子どもや若者については考えられてもいないだろう。

今後は、介護やケアの仕組みに家族を介護する子どもや若者をいかに包摂するかが、研究や支援の上で課題となってゆくのではないと思われる。また実態を把握するために、今後家族を介護する子どもや若者に対する量的調査、さらにある程度の年齢以上の若者に対しては深層インタビュー等がなされる必要がある。「家族を介護する若者が問題を抱えている」として社会問題化され

る過程への懐疑は既に述べた。今後研究や調査が行われていく段においても、「何が問題か」を専門家や研究者が予め措定して取り組むのであれば「問題とされない」「目が向けられない」ことが生み出される可能性を考えなくてはならない。

また、単にニーズを把握して「かれらの問題」を解決しようとするのではなく、家族を介護する子どもや若者の存在から社会がどう問われているのかを考察することは、今後の介護の社会化を考えて行く上で欠かせないこととなる。そうであるなら、まず、非常に個人的なものになりがちな介護経験について、また社会との横断的な接点における排除を含んだ経験について、また現状のさまざまな制度との関わりについて、かれら自身の言葉と解釈枠組みを大事にしながら聴く営為が必要となるだろう。

おわりに

家族の介護をする子どもや若者が取り上げられる時、まず社会からの視線は介護をしているその個人、およびその家族に向く。そして子どもや若者が家族の介護をすることは、少子高齢化や核家族化といった家族変動を背景に起こっている「家族の問題」とされ「そんな問題を抱えた個人や家族を支援しよう」ということになる。

だが、上述した通り、家族を介護する子どもや若者の存在によって問われているのは、この社会における介護に対する考え方、その結果として形成されている仕組み、そして子どもや若者というものをどのような存在として見なしているか、である。また、それらが社会的排除を生み出していることに対して向き合うことなしに、家族を介護する子どもや若者を包摂した今後の介護やケアの仕組みを考えてゆくことはできない。家族を介護する子どもや若者を包含した介護の仕組みづくりのためには、現状に対して必要な支援を打ち出すことに加え、かれらの経験や経験への解釈、またその中に現れる社会のあり方に接近し、介護の社会化を再考してゆく作業が必要となるだろう。

Figure 1 メディア資料一覧

メディアア	日付	メイン見出し/番組名	サブ見出し/ サブタイトル	登場する「家族を 介護する若者」	備考
朝日新聞	2014年2月5日	認知症とわたしたち の手前で1	50代の父が、まさか	Aさん (高校生) Bさん (大学生)	
朝日新聞	2014年2月6日	認知症とわたしたち の手前で2	夫火…見守るため、長 男は退職 介護の仕方めぐり父子 3人に溝	Cさん (26歳男性)	
読売新聞	2014年3月25日	家族介護悩む若者を支援 同世代で情報交換の動き	精神的に孤立、進学断 念 ネットを通じグループ	Dさん (30歳女性、 Cさん姉)	
朝日新聞	2014年5月6日	若い介護者「ヤングケア ラー」、社会で支援を	高1から父支え8年 重い責任 心の負担に	Eさん (25歳男性)	
日本経済新聞夕刊	2014年6月17日	若者が介護する日(上) 認 知症の父 就職あきらめ 守った20代	晩産化・ひとり親…増 加の兆し	Fさん (28歳男性)	
日本経済新聞電子版	2014年6月17日	親の介護で未来を奪われる 若者 ある20代の場合	晩産化・ひとり親…増 加の兆し	Gさん (29歳男性)	上列と同内容
日本経済新聞夕刊	2014年6月18日	若者が介護する日(下) 親 が失業 友達に言えませ か		Fさん (28歳男性)	
日本経済新聞電子版	2014年6月18日	親を介護する若者の絶望 みんなに知ってほしい		Fさん (28歳男性)	上列と同内容
週刊朝日	2014年6月24日	孫たちの祖父母介護	「介護経験あり」2割も 就活あきらめ在宅で… 30代までの男女500人 にウエブアンケート	Hさん (34歳女性) Eさん (26歳男性) Iさん (39歳女性) Jさん (36歳女性)	
NHK総合	2014年6月17日	クローズアップ現代	介護で閉ざされる未来	Kさん (25歳女性) Cさん (26歳男性)	

Footnotes

- ¹ 1980年代末から行政的対応や支援の蓄積がある英国ではこうした子どもはヤングケアラー (young carer) と呼ばれる。ソール・ベッカーはヤングケアラーを「家族メンバーのケアや援助, サポートを行なっている (あるいは行うことになっている) 18歳未満の子ども。こうした子どもたちは, 恒常的に, 相当量のケアや重要なケアに携わり, 普通は大人がするとされているようなレベルの責任を引き受けている。ケアの受け手は親であることが多いが, 時にはきょうだいや祖父母や親戚であることもある。そのようなケアの受け手は, 障害や慢性の病気, 精神的問題, ケアやサポートや監督が必要になる他の状況などを抱えている」(Becker, 2000/2010) としたが、年齢や関わるケアの量に関して議論があり、より広い定義を取っている民間非営利団体もある (澁谷, 2012, p.20; 三富, 2008, pp. 282-283)。近年 18歳未満を young carer、18歳以上24歳以下を young adult carer と概念として区別するようになってきている。日本でも「ヤングケアラー」という語が使われ出したが、中高年以外の比較的若い介護者全般に対して使われている。
- ² (社) 日本ケアラー連盟事務局の野手香織氏よりメールでご教示いただいた (2014年8月22日)。
- ³ ブログ「若年認知症ねりまの会 MARINE」内記事「若年認知症と向き合う子どものつどい」(2014年2月4日) より。 http://blog.canpan.info/team_marine/archive/63 (2014年8月22日最終アクセス確認)
- ⁴ 「ヤングケアラーのしゃべり場」(2014年3月20日、介護者サポートネットワークケアむすび主催、於仙台市市民活動サポートセンター)、「若者介護をしゃべろう会」(2014年4月12日、介護者の集いオアシス主催、於草加市立中央公民館)、「第1回若年介護者のつどい」(2014年7月13日、男性介護者の会みやび主催、於高岡市男女平等推進センター)、「あなたも〈ヤングケアラー〉? 介護を担う若者たちの声」(2014年7月19日、岡山大学文学部主催、於岡山大学)。富山では2014年1月18日と2月20日に「ヤングケアラー支援を考える交流会」(男性介護者の会みやび主催、於コミュニティハウスひとのま)があり、後者は2月23日成蹊大学シンポの登壇者を招いた。
- ⁵ 今回参照した資料内の「家族を介護する若者」は実名と仮名、氏名不詳が混在するため、資料の日付順と登場順に応じたアルファベット名とした。人物と資料の対応は Figure 1 参照。なお今回の資料に登場する人物のうち、『週刊朝日』に掲載の「孫たちの祖父母介護」内41歳男性のみ、介護開始年齢が40歳 (中津海, 2014, p. 159) で

あるため、分析対象からは除外した。

- 6 日本では、若年女性の貧困化は、家族が女性を扶養する前提に基づく女性の家族依存モデルを隠れ蓑に不可視化されてきた。一方男性労働者の非正規化のみが問題視され、男性フリーターやニートへの否定的言説が生み出された（江原, 2013, July 13）。

References

- Aldridge, Jo. & Becker, Saul. (2003). *Children Caring for Parents with Mental Illness: Perspective of Young Carers, Parents and Professionals*. Bristol: Policy Press.
- Becker, F. & Becker, S. (2008). *Young Adult Carers in the UK: Experiences, Needs and Services for Carers Aged 16-24*. London: The Princess Royal Trust for Carers.
- Becker, Saul. (2010). 「家族ケアを行なう子ども（ヤングケアラー）の定義」（澁谷智子, Trans.）. 『澁谷智子のホームページ』. (最終アクセス 2014/8/30) Retrieved from <http://shibuto.la.coccan.jp/sub7.html> = (Original work published 2000). 'Young carers', in Davies, M. (ed.). *The Blackwell Encyclopaedia of Social Work*. Oxford: Blackwells, p. 378.
- 荒井浩道. (2014). 『ナラティブ・ソーシャルワーク “〈支援〉しない支援”の方法』. 東京: 新泉社
- 朝日新聞社. (2014, February 5). 「認知症とわたしたち 老いの手前で1」『朝日新聞』第27面
- 朝日新聞社. (2014, February 6). 「認知症とわたしたち 老いの手前で2」『朝日新聞』第35面
- 朝日新聞社. (2014, May 6). 「若い介護者「ヤングケアラー」、社会で支援を」『朝日新聞』第23面
- 江原由美子. (2013, July 13). 「講演 1 「非正規問題とジェンダーの関連性」 労働政策研究・研修機構主催, 労働政策フォーラム「アンダークラス化する若年女性：労働と家庭からの排除」開催報告 (最終アクセス 2014/8/30) Retrieved from http://www.jil.go.jp/event/ro_forum/20130713/houkoku/02_ehara.htm.
- 藤崎宏子. (2014). 「ケア政策が前提とする家族モデル—1970年代以降の子育て・高齢者介護」. 『社会学評論』. 64 (4), 604-624.
- 飯塚一朗, 中島慎治 (プロデューサー), 寺澤敏行, 先崎壮 (ディレクター). (2014, June 17), 「介護で閉ざされる未来～若者たちをどう支える～」『クローズアップ現代』 [テレビ放送]. 東京: 日本放送協会
- 北山沙和子. (2011). 「家庭内役割を担う子どもたちの現状と課題—ヤングケアラー実態調査から」 (修士論文, 兵庫教育大学大学院学校教育研究科, 兵庫, 日本) (最終アクセス 2014/8/30) Retrieved from <http://repository.hyogo-u.ac.jp/dspace/bitstream/10132/3991/1/YV20310012.pdf>.
- 三富紀敏. (2000). 『イギリスの在宅介護者』. 京都: ミネルヴァ書房

- 三富紀敏. (2008). 『イギリスのコミュニティケアと介護者—介護者支援の国際的展開』.
京都: ミネルヴァ書房
- 森田久美子. (2010). 「メンタルヘルス問題の親を持つ子どもの経験—不安障害の親をケアする青年のライフストーリー」. 『立正社会福祉研究』. 12 (1), 1-10.
- 中津海麻子. (2014, June 24). 「孫たちの祖父母介護」. 『週刊朝日』. 第119巻第28号通巻5257号, 156-160.
- 日本経済新聞社. (2014a, June 17). 「若者が介護する日(上) 認知症の父 就職あきらめ守った20代」『日本経済新聞夕刊』第9面
- 日本経済新聞社. (2014b, June 17). 「親の介護で未来を奪われる若者 ある20代の場合」『日本経済新聞電子版』
- 日本経済新聞社. (2014a, June 18). 「若者が介護する日(下) 親が失禁 友達に言えませうか」『日本経済新聞夕刊』第9面
- 日本経済新聞社. (2014b, June 18). 「親を介護する若者の絶望 みんなに知ってほしい」『日本経済新聞電子版』
- 澁谷智子. (2008). 「子どもがケアを担うとき—ヤングケアラーになった人/ならなかった人の語りと理論的考察」. 『理論と動態』. 5, 2-23.
- 土屋葉. (2006). 『『障害』の傍らで—ALS患者を親に持つ子どもの経験』. 『障害学研究』. 2, 99-123.
- 読売新聞社. (2014, March 25). 「家族介護悩む若者を支援 同世代で情報交換の動き」第16-17面

**Media Representations of Young People Performing Caretaking Roles
in Families as a Rising Social Problem in Japan**
Miho MATSUZAKI

In Japan at present, young people who perform caretaking duties within their families have begun to receive attention from the media as being targets of aid. This trend entails the following questions: what exactly is being highlighted as problematic by the media, and what kind of subjects does the media portray these young people as? This paper will analyze the recent Japanese media coverage of young people in caretaking roles within their families, and pay particular attention to what is overlooked when this situation is recognized as a social problem. Additionally, this paper will not only focus on what is, but also what is not being discussed as “problematic.” Finally, through these issues, the author hopes to present additional tasks and discussion points for future research on this subject.

In the media, young people who perform caretaking duties for their families are depicted as subjects who have lost the opportunity to choose a life path, and who experience difficulty in launching a career. However, there is a gender bias in how such “difficulties” are depicted, reflecting the existing gender bias or discrepancy in how society responds to young people who assume caretaking duties. This does not fit into the storyline of young people who nurse family members “trying to overcome/overcoming difficulties,” and so there is a need to recognize the oft-overlooked variety in the experiences or needs of said young people.

Furthermore, in media coverage, caretaking youths are portrayed as isolated from friends and school, or even as subjects who are removed from the systems related to caretaking entirely. Consequently, they are thought to require aid. Yet, the very loneliness or isolation that these young people experience due to caretaking is founded on the way in which society views caretaking and young people. Considering the present

caretaking system, the attempt to provide aid to young people performing caretaking duties does not respond to such issues.

The existence of young people who perform caretaking roles within their families is not taken into account within the current long-term care insurance system in Japan and the discussions on the socialization of caretaking.

In future research, a detailed discussion of the experiences taken from first-hand accounts of young people performing caretaking duties, as well as a reexamination of current debates on the socialization of caretaking and the systems in place, will become necessary.

Keywords:

Young people who perform caretaking roles within their families, Young carer, Young adult carer, Media, Social problem

